

歌の思い出

関省吾

南高校の標本室に初めて池上先生をお訪ねしたのは昭和36年(1961)ではなかったかと思う。その頃、天野先生(当時は平田先生)につれられて、弥彦山の白濁病菌の寄生植物を調べていて、植物の指導を受けるため天野先生とお伺いしたのであった。

その後、昭和39年(1964)にじねんじょ会が発足し、池上先生、尾崎先生に顧問をお願いした。この頃から会員が池上先生と山に入る機会が急に多くなり、現地での指導はもとより、まとめの指導も受け、本当に貴重な時間をさいていただいた。まさにじねんじょ会の育ての親であり、会が細々ながら長く続いてこれたのも池上先生の支えがあったからである。

池上先生とご一緒した山は、飯豊連峰、朝日連峰、谷川連峰をはじめ県内各地、さらには福島・相馬地方(西山宅泊)、埼玉・秩父地方(斎藤宅泊)など県外に足を伸ばしたこともあった。先生は遊んでばかりいる私達を実に根気強く、上手にほめ、おだてながら植物について熱心に指導された。植物を通して、真の教育者の姿と感じていたのは私だけではないと思う。

先生の思い出はあまりにも多く何を書いてよいか悩んで時間ばかりたってしまったが、先生が教えてくれた歌(歌詞)を書きとめておきたいと思う。

山の夜、テントの中で、時には焚火を囲んでの勉強会は実に楽しいひとときである。(飲みすぎに批判もあるが)ぶかっこうな山のような荷をかつぎ、宿泊地への到着が必ず最後になる先生は相当疲れているはずなのに、夜遅くまで私達につき合ってくれた。先生の植物の話、山の経験談は実に面白く、勉強会の楽しみの一つであった。そして気分がのると古い歌をくわしい解説(どこで誰が作詞し、誰が作曲したかなど)つきで、美声(先生もかなり自信を持っていた?)を張りあげ、実に楽しそうに身振りをまじえて歌ってくれた。

それらの歌の中にはよく知られた歌もあったが、先生だけが知っている歌があり、そのいくつかを教えてください。

(1) 浪路はるかに(1982. 8. 6記録)

・南満州蒙古のはてと
男意気地のそれ草枕

・遠く南米ブラジルまでも
男度胸のそれ旅枕

・潮の八重路の極地でさえも
男ひとりのそれみそぎ場所

・どこで果てよと墓所ひらぬはいらぬ
日の丸国旗でそれ身を包む

昭和57年(1982)の夏合宿は高橋昭夫さんの案内で矢代川をさかのぼり、火打山をめざした。8月4日、新井高校に集合、移動して矢代川第三発電所の近くで幕営。8月5日、重い荷に苦しみながら発電所の取水口にたどりつく。8月6日、一本杉(熊小屋)で幕営。

この夜は翌日下山する人が多いので、盛大な勉強会となり、勉強しすぎて木にかけ登る人が出るほど盛り上った。この時“浪路はるかに”を覚えてもらったのである。

8月7日さらに上流の調査をし、8月8日には下山し、新井の井出さん宅に泊めてもらった。そして8月9日には牧村、三和村方面を調査し、鷹羽鉱泉に素泊り(1,200円)した。

8月10日、鉱泉の周辺を調査して解散したのであるが、池上、奈良場朝湯を楽しむ、と野帖にメモがある。

(合宿参加者 17名)

(2) 流浪の旅(1986. 8. 8記録)

流れながれて落ちゆく先きは
北はシベリア南はジャフよ
いずこの国を墓所ひらぬと定め
いずこの国の土と変わらん
流浪の旅のいつまで続く

町の工場汽笛が止んで
オロラの空に光かがやく
昨日は東 今日西と
流浪の旅のいつまで続く

はてなき国の世界のはてへ
流浪よ 流浪の旅よ

昭和61年(1986)の合宿は雨飾山を中心に行われた。8月4日、糸魚川駅に集合。車に分乗して梶山までゆき、雨の中を梶山新湯に登った。8月5日は激しい雨のため停滞(完全な1日停滞は最初で最後か)した。紙かえをしたり、池上先生の講義を受けたり、温泉に入ったり。8月6日は小雨について登山開始。途中雨はやんだが、例によって前後

かなり離れてしまい、バラバラに行動することになってしまった。私は午後3時すぎに雨飾山の山頂に着き4時ころ下山を開始したと思う。

池上、石沢グループと笹平の下で会ったが、山頂まで行ってくるといふ。止めて、やめる人達ではないので一人とぼとぼと悪路を下った。

大部分の人が宿に着き、炊事を終りいくら待っても先生グループが帰ってこないののでついにあきらめて9時半ころ夕食をすまして待機した。10時半ころ石沢親子が到着し、最後の池上先生、渡辺茂さんが帰ってきたのはなんと11時ころであった。

8月7日は梶山まで下り谷筋の調査。8月8日は塩の道をたどり、白池まで往復し、夕刻姫川発電所の空地に移動して幕営した。

最後の夜ということで、打ち上げは大いに盛り上った。その時池上先生が歌ってくれたのが“流浪の旅”である。なおその夜は酔った元気(?)で10時すぎ姫川温泉の露天風呂に侵入し、声をひそめ合いながら皆で広い露天風呂を心ゆくまで楽しんだ。もちろん風呂好きの池上先生もニコニコと一緒に入っていたのはいうまでもない。8月9日は午前中調査して早目に解散となった。

(合宿参加者 18名)

(3) 弥彦山 (1996. 11. 16記録)

越後¹⁾の国に名も高き
弥彦の山を見渡せば
蒼嶺雲につき入りて
尊とく清き眺めかな

前にうずまく日本海
沖べに浮かぶ佐渡ヶ島
はるかに²⁾眉を引きたるは
遠く陸羽の山々か

海風清く袖吹きて
浮世のちり²⁾も通いこず
思えばげにもおん神の
宮居まします弥彦山
(先生の書かれたものは1)
越路、2) 風となっている)

平成8年(1996)の11月16日、山納めという名目で有志が弥彦山頂の理学部小屋(元オーロラ観測所)に集まった。車、ロープウェー、徒歩など気ままに夕刻集合した。私は白崎さんと菊まつりを見てからロープウェーで登り、午後4時ころ小屋に着いた。5時すぎには池上先生も含めて、予定の顔が揃い、早速勉強会が始まった。先生はかなりうっぷんがたまっていたようで、植物資料室の話を夜おそくまでされていた。この時“弥彦山”という歌があるという話をされ、歌詞を教えていただいた。

翌朝、炊事をしている間に先生がカレンダーの裏にササーッと書いてくれたのが別紙である。メロデー化して教えてくれる人があればと思っている。

11月17日は多宝山をへて石瀬に下ったが、先生は鷲尾さんと別行動をとり、下で再び合流されたように記憶している。(参加者 10名)

昔、南高校で儀式のある時は池上先生がピアノ伴奏をされたという話を聞いたことがある。先生が音楽に関しても深い造詣をお持ちだったことを思わせる話である。

残念ながら先生の歌をもう聞くことはできない。せめてここに記録した三つの歌を調査研究して、メロディーをはっきりさせてくれる人はいないだろうか。そうすれば時々みんなで歌って池上先生の思い出話に花をそえることができるのではないだろうか。

弥彦山

The image shows a handwritten musical score for the song 'Yayoiyama'. It includes four staves of music with lyrics written below them. To the right of the music is a simple line drawing of a mountain peak with a figure standing on top, holding a staff or stick. The drawing is annotated with small text labels. At the bottom of the page, there is a signature and date: '1996. 11. 16 y. Udagawa'.